

アオサギ観察会

2011年5月20日

昔の人々の目にアオサギはこう映った…

ギリシャ神話のアオサギ 古代エジプトの『死者の書』は別格として、アオサギが文書に登場するのは、世界最古の文学作品である『イリアス』（ホメロス作）が最初と思われます。ここでのアオサギは、アテネの思いを託されて、戦場にいるオデュッセウスのもとに飛ぶという役割です。神のお使いというわけですね。

アリストテレスのアオサギ 少し時代が降って、アリストテレスの著書『動物誌』にはこうあります。『灰色のサギは巣についたり、交尾したりするのが困難である。すなわち、交尾しながら鳴き立て、「眼から血が出る」といわれ、また惨めな格好で苦しみながら産卵するのである。』たしかに、アオサギの目は交尾期には赤く染まります。さすがはアリストテレス。鋭い観察眼です。



旧約聖書のアオサギ ところが、キリスト教が勢力を強めてくるとものの見方が一変してしまいます。旧約聖書の『レビ記』には『サギの類は汚らわしいものとして扱え』、『申命記』には『サギの類は食べてはならぬ』とあり、どうも穏やかではないのです。ただ、これも考えてみれば、現代の私たちが鳥は鳥インフルエンザをもつてるとから触っちゃダメと言つてゐるようなもので、アオサギの人格？そのものを否定しているわけではないかもしれません。

ベスティアリのアオサギ ベスティアリというのは中世ヨーロッパで何百年にもわたって読まれ続けた一般向けの動物寓意譚です。ここでは様々な動植物が、キリスト教の教義を都合よく説明するために登場します。アオサギはというと、旧約聖書のときとは扱われ方がずいぶん異なり、世界に秩序をもたらす高潔な存在として描かれています。このように当時のアオサギがキリスト教世界で好意的に受け入れられたのは、人々がアオサギにフェニックスのイメージを重ね合わせていたからかもしれません。しかし、それにしては本の挿し絵に描かれたアオサギがあまりに頼りなげなのが気になります。

